君英發句集

乾

乳ぶさを我掘るわらべの花ちるを月もむう
ひて指さしそうそ天性のはるとしにハあらえ
うゝいやしくも知恵とつかれ出てそ
ばあしたなる正直さ天然寺のとをる
よわ偽ばかりとてなれるあるべしハ
変化えん自うみをたうし柿さくの
みるひとさのふ苦ぐさるこばれやゝ
却の花乃白毛数えるうぐ出るつれ
あしたるの器かな壁網行のなるか

早稲田大学文学部図書
雲英末雄
53-7520

糸海（イタミ）とゝ云る脆元をゝゝぬゝゝハ
伊勢ゝ参ゝゝゝ連流れをゝ人おあゝ
のゝゝゝ年ゝゝんゝゝゝて、ハッゝなゝる
事

ゝひしゝゝゝ知ゝゝゝゝゝゝゆゝ
ゝれをゝゝまゝゝゝゝのはゝゝゝて、
ゝゝゝゝゝ事ゝ嶋あゝゝ十三年
ゝゝゝゝの義をゝぬゝて流をゝゝん
ゝゝゝゝ世をゝんゝゝゝゝぬゝの

ゝゝゝ世ゝゝ因ゝる梅の義をゝて元元
ゝゝゝは説河やゝゝの屈をゝゝゝまて
ゝゝゝゝ元をゝゝゝゝゝゝゝゝ
元文ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝを訓ゝゝゝゝ元六十年ゝ及ゝゝ
世のゝゝ元ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

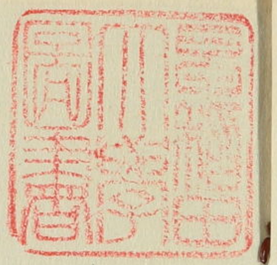
ら舞・よるとて・句を拾ひ・石の俤を
ふる人とて・きのこ拾ひ・ろまん
えもなくて・虎ふく句ひあるを心
拾ひの拾ひよりて・八百もなの書母
なさなるこころ・はるかにみなぶし
抑十七年のもとより・人なかるて
棒ふちぐ・説法のもあり・物
吟のもあり・ひとりてさる船
あり・又序や・跋や・詞や・ぐ・やて

ろ・蕉くる孫ふなぐれ乃ろんとの句を
ひもとれものこと・なぐるとの付く・
享保十二年のこ・ちまのこ・はるな
こぐる言のもとに・まるる拾ひめ

おるつる社

なゝぐる方全部百三拾餘丁ありて翁は自撰なり。往年
揚芳堂これをひろめ、蒐本氏と梓行せんとしていまだ果さず。
其本芝木氏に藏して、已に二紀に及び、先年京人本集
より抄して句選を刻そうといへども、本集は翁の得意にて
その世にもれぬを抄せん事其ほゝうあるべからず。余が本集
梓行は志城板にて、事は翁の祖父なりもと此川と號し
て、義も深なるゆゑ城志なりとかなど其他の集抄に
も散見し、又あちこの翁を伝ぜるは、皆つゞかか
ゝりとらえをとゝ某氏に托し、句選に出せる
を除き、文部をわかち、或は句集に汎をもし、跋文を
略せるは、主出しに、校正城をもめて、蒐本氏とそうゞ
公ようと、異く京にとゝなりて書記に復せんと
べし。是やがて業をうけつぎ、主顧はゝものゝ餘
もて、おのゝ師恩城むくゆるあり。

天明三年癸卯春
大阪興文堂書坊　高橋徳恒謹識



なゝぐるの一

春部

歳旦

春立や是も中うち松の色

和州郡山に年をとりて

いとゝ又大和正月三笠山

初日影まつ出れいこまやま

大ぬゝ侯も見えし春日山

猶高峯の古つゝを見えて

事はしえいろやねなのきしろほ
きうつさんや先おわらみそれのはれ
門松やうるわらぬ武蔵の山
火の数やう徳栖れまるや仏
立年れ続をうの花ようせう
まとやを人うまれへ紅き
そのうをうむれ年立うく仏
かをふうう雪まをさを朝れ元
四十をうなうをえは

花というをを先れをのうう石ろ
をを白むを和はををのををしむやて
や様ろををれををの花や元
赤像ひよやをう和はれ様ろろ
はあけよはて秋の田うぶせに
七年えうれをを
俳うれを様をを見をもるあれたれ
うを俳やを遠我拾て和むを
はよ月よるれの報乃和をろ月

祇園の社にて

あらしけもいとて春ゝ新もち
江戸にて　の秋いとこれ
外のことをよつくゝ

はるれきの十程をえはは後

江戸より帰京のゝ

朝ゝ水うゝとき初ゝゝみ
ゝもゝゝ年の冠花もいちゝう
初ゝゝきまの月ゝまいるの花
花の背ゝ海老はあゝ初ゝ

梅の花は咲ゝゝ額休ゝ
梅の香の春人なゝて花ゝゝんゝのれ
ゝゝゝ知ゝて生ゝるな

梅ゝ知て　人のけゝれ初ゝゝみ

○三上某日ゝゝ家の列のゝゝゝゝゝ但
句選ゝ出ゝゝ八ゝて久

河氣史焼まゝゝ八ゝゝゝ

如月十日鐵卯懐舊詞語る翁奥り

ゝ春ゝゝ咲ゝれ八咲ゝ

月は鄙八拙ゝゝぬ毛　才慶

春の記も春なるゝよゝて　末山

此連中八児貴才麿来山補天素雲西鶴
万海執筆七吟なり

上巳

色白ゆて たけのこ老を捨子かな
子銭たつぬる母の細りて 花をうるを
かなしき絵に讃せよと申時

なきうけ 娃の母も 水のゝみ
ちしめて和郡郡山の
さとりをまなびて

天の地の花は清水銭見初る東
ある名勝度忙礼の一書に

咲くおいさやそていつしかせ蚕かはら

る新独吟

廿八注りこそあしや雑子の郷
此名は人の塚の松の本にて生りし
文覚袈裟を書人の家に求得たるよし
によ説話あり

松の本と名乗て志りなかりし咲子哉

月ある夜祇園通り住ける時

こぬかしや本摩の里り餅ふるえ

正月十五

小家降ふとんも御の火影の乳
居所をしらず

うちかれて様子も白し初日影
井戸堀てまいらする也松乃ちな
むさしく音信さるゝ人のもとに
何となく独居しゐたる侘しさなりければ
うき世をも内義まかせてなん人世いふ
無能の大舗光成此もとより文乃内に侘くさ
発句を入てあそんでしまうし
九年の牀より花の顔見えて
こゝろより発句をつらねて其紙のはしに
天人やかなての此花の見さき井
手の世のまゝき音を鳴らさるれ
雅る歌独居の侘乃庵まれて

燃る世は底うちこきて是御ちゝ
坂の間よりに人乃よりふく
ちりあまはね在の妻よりもちさせて
下略　○右句並に八見読にへつりて未定にてなる出版但し本集一本にて見に入れ
伏く蛇八江戸も侘つる妻の
苗代や隠居へ行てまを待く
正月十五日　亡子より一回忌に
ちか年より拙一味もとまされぬ
二月廿五日狩我にまゐりて
廿日余くらんとゝふ時

比られぬ文さへありしあせ花ちらハ

やられ共ある石川正望ぶ以二一枝一得二一根一者ハ大欲也と文字まて杉月えうりと抱うらけれとなるをこれにてすまて

芽をふくやんさまさのよ無根草

春の野に蹴踏（ツクハウ）て居るわられ待まし

角菱の餅まわりとも桃乃花

さ治りまかくなれ前ねよ水うる家つこふ

をうるさやんのお出のおらよ我をちなまりよ

陳生都の先母と大久保五古をちてまなくて
言妻ちくりうられ乃古合句の亭

松枝にハほんのあるかたもころ

上巳

ころ姫や数の雛に来婦つま

玉腕子ハ恵林大佐のなりわりる名よすんこれ
みことなりにほ次あまりくの祥河詩をわうりもとををとまま
て琴のうる年エなりりえ採ころのられあと徒し舛の毛
月れくし先甚御よ居まを徒してやうてくおうる
程よなりうられて盛りしてころうそうし些い
ひしほとり

月も雪もなか河の錦ふ花も余よ

牡丹　江戸止水亭

あくとまて萬字をちられてまめ廿ハ

ふかしほとつせ我して西吹このかつれ乃
松りやうれんて発句らし給はく
それをうけとりて　書我をし　下さや
正月廿日京森其雅の許へまねかれて同氏
正図一家しうたれ発句　雨室
咲せしと　来初るはも　寿のはる
このたびくさ云は大佛の日うたる森山図の許
よりまねかれをうけ御家ありて宅の
さしき早う咲かうたれ庭のうるはしなる梅
此花白く句ひ殊よ清らゆきの係をうけて発句
雨室ありてる印象
雨室の　梅を見せても　登なうら
然るに廿五日小野の御詠を
とて　柳川　雨室

梅我る　心もおのれ　鼻たかき
海も九ろ碇磯の御門主へ
めされうる時　雨室
樹の高き　綴も高して　花や咲
河内国の人八幡うあつかし
土師の梅わ来る来ら発句
それうとれ　おのれを　梅よ　鳥とて
これ里より見て
梅の花　同しも　香をして　酒引つ
翁といふ兎し
新春乃　梅を　寐ぬ　顔れ　翁くのう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

膝[illegible] 雛の着物[illegible]

[illegible]を抑[illegible]て川端[illegible]

我才亭[illegible]

春日の[illegible]

[illegible]髮[illegible]朝の文[illegible]

[illegible]

幾[illegible]の文[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊丹[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

武士の[illegible]

[illegible]

先[illegible]方と[illegible]幸(サチ)よろしいなるか

[illegible]の男子[illegible]

[illegible]

和[illegible]を[illegible]もこそ[illegible]ん　松の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いちはんは[illegible]　[illegible]

人の[illegible]　[illegible]を[illegible]　鬼[illegible]

[illegible]

茅柳の[illegible]

[illegible]

伊勢の海[illegible]

小国り脚[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人[illegible]

[illegible]

[illegible]

生て写さもれハえらく表乃る

初春　石町旅宿にて
上野のうねをみて

春うまるる時のあ様こそや表　寒

春をよみをもてうとおもうすう野をれ

六十賀　ハ万年ぬと
うるをして

紫雲を竜のふつもの車の友

うるをそて孫をまうけきる
うるをるをれうれ時不をる

露竜のあゆと程よ紀表日ようれ

月うををく行むせるれよ乃ら

曙梅

乃嘗てを梅のをくよむ光のを春

大寿の絵よ

佳賀をして京も四ををを神の旅

大坂宝宿の小寺納の
絵をるをを

うるれいや高陳よ春花

箔ををて
うををるふをを侍女の絵よ

春の春や むらの袖う保氏を

寿九向うもをうよのの
梅木の枝をれをうに

かしの木やの初枝ちる

小町の絵よ

あちらむきうしろもゆしかしの

まゆをんせるる小町の絵よ

かるの月やあるの奥ふかのそれの色

七十賀よ

ほそ杖のまちもあゆもいそる

一切経堂の絵よ

梅つるやの衆生をもて好の詩

八十賀よ

ほそ咲きふ咲きもてあそ眉乃八

松まを寿を祝する絵よ

玉代の金をほそむまちうれ

月次の流行せる句にて初春の発句和歌

書まもし人の立紫れ和まそ

書の一図をなむ人の

寿ぐるほた

そうそれ仕ようよ苔やさそう麻

古今まさの芋生のまさまさ麻にあそ

まそ書の名なれ 梅麻てなな敬考

きさらぎの四日ふる雪をいとうとかの庭に花庵の
庭の花ふる雪を惜まるる人の
伊丹鶯阜此吟

雪ふれば花ぞ咲けるもゝの花
うゝれ梅うゝる法

笠ぬ杖面影さそふ人ぞ恋しの
ゆれ八重咲梅の花の
うゝきも人ハをうゝまるゝよれ
佐川流筥南部ほゝきて
春の雨

春の雪ぬ去ぬ此ぬ生ぬ花の雪
高砂の雪ぬ梅の花と
四ぬ此ぬ花ぬ梅の花と
ふかうる法ぬ漢ぬて

ゆふ雨ぬ海もさゝ高ぬ梅
あゝの赤母八十歳ぬ
春雨せぬて

はれ初ぬ花梅ぬ　む椿
ゆゝうゝうゝ法ぬ

鞍のよゝ人もおゝゝゝゝ時
雨ぬ和尚牡川先生ぬ法をかゝて
ぬ漢ぬ梅ぬて法ぬ

紫雲此花ぬ月ぬ雲ぬ
英一蝶ぬ
ほゝゝの法ぬ

はゝけ　ふゝ雪此花ふゝ

[illegible]十五位川係箱
[illegible]の時分無

七夕の歌[illegible]
[illegible]十五の求人の
[illegible]毎年[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]の時分も九十[illegible]

雨水[illegible]
[illegible]の林[illegible]の雛
[illegible]

[illegible]て出[illegible]て悔[illegible]
下野国[illegible]の位人大重[illegible]有[illegible]の[illegible]
[illegible]て[illegible]の後を[illegible]

面影ハ[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]

[illegible]乃[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

何もしらすして新世よ呼子鳥

此圃に引とらるゝの翁をいつけなくさきのころ九十年のよろこひをのへむとゆるしの目出たくはせのかきもの方圓にまた辞なれるよせの後をかきつく侍りて

月花や老の白髪もみつくし

白梅やまつしもを去年の春のる

備後国府中の住人窪川氏鬼笑牡丹花の鉢あまたうちをもつし文台に

かいほれはきみしぬるのこと

右文臺寸法 竪壹尺九寸 横壹尺壹寸 足ノ高サ三寸壹分
金物打 ケヤキヌグヒ板 裏黒ヌリ ○此句文台裏に書出て ...
出るふのみ筆初夏なるゝものとて ...

花桶といふものを作る 作よ発句を付て手向侍りて

花桶や千代乃名立の初嵐

此月七日発と小野木静の庵にて 花を入れ枝をかれる人もなくなりたる発句をといふ人ありて

まくむ月入相のうちよ人ぞ哉

白楼の花なる枝に掛れし三足鳥帽子に 帯おとされ衣のさきにかけて 来るかふ句を後のをなれて

あ了いふやいなおほせるよしてなる 雑

咲花やとしおのをなれ来てくる

附 俳諧平外稿 四季並載

岸信和久てて汐干の淡海山

京の百て

水長月や伏見の川さ舟の音

京洛川や新書立てふくろう

桂芦や船入江のさ長波

七車さその二

夏部

鶯の啼もあやふさ夏さて

かんこどり藤の西吹へ

ほとゝぎす

夕ゝん八鮎の腹ゝる川瀬哉

ほゝなく夏の蛙ハ吹ゝ

梵天丸を

白ゝも広き味ゝ芝葉瓜

鉢たゝき大和子供や立田寺

霰筍の花ともおもへ夢ほとり

芝柏東武に行を

田子か浦日和や都見えよかし

天神奉納して

菅原やみちしる鼓枕の音

夏想

京の町て秋のおもかけやほとゝきす

鼠の鳴もなんの夢もなし夏衣

孫七か菜舟にて

松や舟みよしの川に木瓜つし

坂上青園寺にて小倉の紙をもらひてやる夜
帰るさ文もらひてやりて戻時

秋もさや小倉の紙の御まて

その夜ね覚入し時

文なかりせしを

ねさめけや蚋に泣まし所をまて

仲冬の比京に住ける日夢の国へと帰る西
替花に行ける日帰る時

さえるれに雪八志ろしぬるわさ妹

伝丁にやとひて

夕くれや辛夷のちらす名残哉
扇にて扇ぬれぬもぬれし人の宿

乙夫に文遣し 見せて

夏草は刈らぬ花や也けり 続
山下正栄説名ありけり思つゝもゑに
名字宗よし昆はり名折に甚勢ありを
こそ教へしてられしを名はた時

水に手勢てうつ夜乃花
説諸の言をよくよと 小枝の文に時

青梅に顔をまちて名乃ぬ味を忘れ
五月十四日金毛の家に昆衍御して言水
輟士之白百丸各うちつりけて行名るにこえ

此など行しよして錦唑え代うちかる人康兄の
係えを家まつけて説諸無りきなる子に教句
せさえるはたく時

水やその比ほのしや烏帽子顔

五月廿日雨ふりをゆれ八
年ふれ八虎もなりゝやこまう子

水無月廿五日讃州の人に
おくる餞別
やまの田も親国へいんまつての上

友衣さらゝしもなしそ
孝玄はもしめて無く

九十二にて
身まかりけれおよ彦

九十一も二きれしそれも夜衣
妻に別れし子を捨ておかるゝ
よもきられ明やきいふとて 何哉
美濃国加納より登る時
おる賀への音も杜いそ乃夏木立
そん女の住居あらて
人の哀しいつらん
秋も来ぬ主人乃国れ子まくら
妻に別れて通りて
盗人の塚もむさし夜の草
加納よりはれあつる時
郡上内通りまねうましに

きのふしや何も加納の青田哉
中村氏請けの許まで志けれ也らるゝ
なしのおほへぬ御ききの名所に
まいなかへいなは又らん秋もやって
六月の初めに兄弟まで
雅句みを印時
第八穂に出る雪乃なめのこうて
金毛亭まて橋にて
越を出て雅句手伝の時
ゐを降る庭て橋の起てもろ
廿日の雨を
とふ袖そこにきやし降洞

一心院常念佛

あつし鉦の音絶ぬ一心院

霊山にて

そこや庵り水に落くる声

大坂に住る鉾をよみしもの書と見え
てかゝる事の有て京に帰りしてこれ
より石垣に腰掛ても句なり侍ると聞
しをあはれに覚えて

なちられハ昼はしをおしみ

五月雨にて
大水の堤下に見て

夜半に訓深秤乱大路の声

已夫ら秋さ隣に住て人しれ声伶さらる事
を句にあらし給の時八きのふなりし
すゞ虜られハ泣し

夜かゝる備へたりも霜なけ

岸聖次郎八之節此京に有て若く
世に音を志られぬ夜もすききのふゑよ世
をゐる日初てうれの一曲を耳をせて

知の花水に系よ乱初音乱

長在集り

光廣うゑるの御より
某侍に贈る

茲井にふしなれ中のもえしら乱

五月雨を讀に筆つゝる業

法名うり野宅にて紙法事
[illegible] 咲人等まれにきたる
祇園の御楽法
風風のいとてしぬる名残うれ
きまき所女の花乃歌わるて小野の西方なる
義うるをもるまきもやるて和の花月
うるかめまるゆきて
[illegible]ハ中きくば浅学をぬるて 夏衣
思ひ[illegible]人のおもてにて猫を眺望
書の穂もきるむもをを法の形
きれる人のもく[illegible]

[illegible]
五月十三日 蝶花を方[illegible]
十九日 [illegible]
[illegible]の穂ハもう[illegible]ひるの夏法
きるうるまて 座敷事
[illegible]流一方ハ猫の床めう
[illegible]むけもるふの束車
五月十日 月尋事
下[illegible]人のうるてきるる
不二

枕さへ浮寝さびしや夜の雪の風

也本　おもひおもひねざめしつゝありあけなる
文鮮の床もかはらやなく夜中　雨り

日ごろの志わざ後に後

梅いちぬ花や神のまされ子

橘の名たかくふるき寺にし　紀国の人義
名もし発て香官に来て花橘といふ説詩の
ちをおもひ立る程に橘の香句して名付よ
とてる程よ名つけ置てくちなき話たん
よの悦ひを述ぬ

橘よ今をむかしの名残の程

是践いきくさ枝を撰のつく守生是んと云出
さるゝや鼓付げうちわするにかなひくと詠
名ん苦よおもひよせて韻勝に待されん一句を
おくりぬ

風よりもなびく名のみも夏の雪　尺水

卯月の末安藤和母身まかりて

聖かさなるよゆかりしや鞍あぶみ

芭蕉　翁二句

床よりも父よ骨打あかつきこえ

日よ耳何かぬ風のそよぐ

ことのよしに
桃青よりまれて　ちり

いまはしや人の顔巡る鉢　紫

乾亭ちるる人のもとく
廿六夜待まれつれて　家ちよ

待つひや夜の場もさや　ゆめ也紀

山路を見て

むさし野を人とゝもに居られ
人のゐるこの方まゝゝゝ
あちさゐやゐるゝゝゝゝ
輕人うたゝゝ
海ゝゝゝみやゝの笠にもこゝゝ
日まゝゝゝ
青梅のたゝてよいまむ旅出る
端午

霧ゝゝし菖蒲の葉の朝露
水やいゝなゝ礫は端石
青の、國訪れ湖をゝゝる
ゝゝゝこゝ水ゝゝゝゝゝ
海尾老和尚
ゝゝゝゝゝ海を夏乃
卯月のまこゝを
ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
祢宜の傘ゝゝ
白ゝゝ乃影
物を拔く和ゝ旅 雜
新ゝゝ傘の下

[illegible]

一礼一回忘

[illegible]

小塩[illegible]

[illegible]の畑も[illegible]

杉の村[illegible]

[illegible]杉のあ[illegible]た[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

未行の弁をうきうきと紙鳶
きりきりのうなる尾のある凧揚
淺霄や杖よ老嚙む嫁と門
淺霄や姫乃国扇よりはれお撰
凧京紙水

てらら紙常紙白一日南瓜
結繋や淺きたれく朝きみ
夕立やむりたれ乃新麦
麦焼きたやむりたれ乃俄白
はつ白うれる麦先生付至五り寄
刈の如うかたき麦をはうて夕立きる
うの屋人

秋部

秋彼岸
かつ井戸八西瓜よ重き月はこの
大和めうして
秋も立や宇田の岸うの焼うう
次ての月八彼よ十三重夕月を彼よ
あまりとうを少を行うきりこ八の法
出て いたりて 歌法れ法慶乃月
体斗 宅うて
うう 四もうてうれ嵐九重

霊棚や牧八血ぬれて成あれく

支牧氏伝国神て出雲の内伝もれを絞る

きてそなる鬼も来の傍陣屋ぶ

剣術ありきる人る

塩塩の縄をえても力味ゆや

美毎そ伝わるお見の母ゑ

佛もそなりて訓うく糸瓜ゑ

多分氏神の力汗を出て伊勢

代参せ一あををうぬきく

てゑや菊乃舞の神

利乃ゑるゑ八月十五夜

月て膝よる乃なく月見ゑ

ゑくゑぬ人もあらゑれゑの月

をゑゑて猿もなゑ山猿ゑ

月次の参ゑて

ゑゑゑゑて菊をいくゑゑ

ゑ傍

ゑうゑ栗ゑ味あれ節句の形

七夕

田ゐ水の汐ゝ流て早の穂積ル

九月十三夜ゆふ月を待て
帰ほのゝゝゆきをいそ

ほの月入て新ゝ早乃穂

六ぱゝよりの作ゝる野田菜の葉ゝ許ゝりて乃
菜葉の抱風なるゆゑ日をゝゝ
番ゝしてゝとゝゝ用ゝに供ゝ菜の汁を
ゝゝて

二里いゝる門ゝゝゝゝ芽ハギ乃月

交の嗅あゝゝゝ森のゝゝゝ

性死の仔丹の系常ゝ
ゝりてゝゝ

秋時ゝゝあゝ鬼ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝあゝゝ

いせんおきゝゝゝゝ叶ハゝゝゝ

佛の足ゝ袋を立ゝかゝゝ思ゝゝゝあゝゝ
ゝゝなゝ茶棘ゝゝゝゝゝゝゝの秋
ゝゝゝゝゝ

園ゝ

渋柿の赤ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

方ハ田園ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

風ゝゝ月ゝ輪ゝゝゝゝゝゝゝ

九月廿六作ゝの句ゝゝ

[illegible]れもうれしあるかな　四社のあ
奥の海とうを
[illegible]方をていけるをおかしぬ
いんしゅの中の秋
老母をなんるむをうる
去年より似くらべなるハうて猿くらめ
猿猴の絵
此所柿のもあるくとあのそを
やうやく家旦懐旧
[illegible]
[illegible]

[illegible]
おせのやうに秋もを
[illegible]ひとつふるハ秋のそ
埒を古る　埒鈴る
[illegible]の中を春を拾ふれハ
[illegible]やもれて[illegible]を花ちう
[illegible]
拾いそめ魚の片目やあ[illegible]月
流行拾のる白を見ひ出て青の
[illegible]

新古のむさしの月より満来まて

七月の部云々

秋のむやや踊扇まて用ふるあれ

出雲国ねれ来ぬるまりなんて

京の月ふるにあらて

八月十五夜

八月十五夜

京より秋きりの高きを

方ひろうを景年ふる京東秋ぬ

京陽

久ふるや朝の松ふる京の菊

独吟百韻 高の月

月を吟

そゝろなるに なるこ吟 松

蓮ふるせて松ひろに京をなれて

下略

城第四大堂塔ふる住て月

サるふるて彼地ふる

とゝ藤て住れ秋の森見 哉

大宮ふる京へ降る敷ふる京ふるに

九月云日彼地ふる高一松ふるてあるうとて

了 張の住ふるてなるやうなな

路面稲荷詣り

友とする人の花も又車の花の家
もりやうそやうう〜秋乃うれ

九月廿三日出立の因幡人
秋ふかみて弟子まるかぞ分ハいりこ
竿もやみの乃ほうこうるの月

八月十日淀小月次の
挑灯乃り

あつまり数のほめうめ望を伊うふ
ふをゝ文車の文のもて
やう〜花数よ入うる女のもうて

秋ふかみ高ゆ高ゆ高ゆに伊度の乃を
新宮宅まて

よしやうに火袋伊さ有るれ

九月彩り人の書
もめうに

菊こゝう拙なう年ゆもうれふ

九月十九の昼うを

高うに起く目をを伊うふ

八月十五夜

月ゑん人の脱(モヌケ)も有るうれ

九月十三夜の月を

名八月よりはまさる　後をも見

立秋

秋立や　花の初　言はれぬる子

日よりをも

秋や　今朝を　忘れぬ　袖を　袖

七夕

地まあるくて　夜や　早のうれ　数

中元

嵐尾　ゆよりも　はるかに　ゆかしく

思ひ　なくて　深なれと　れ　なるし

九月十三夜　神の月

神の月　来てさく　まわり　尾花哉

十五夜　十四夜　十六夜

去年　あるこの　月見　哉

めでたく　と　家　歌　さや　窓　月

明なるに新しう窓の月
更癖くとひとうよるの月こゝハ
最清よしうをかしき月のうつ
かしうやの月の光水に月
只の秋れ是出るやの月ハ空
芭蕉ハ此句を
なりの光をハ蓋ハ松ふるあく月ハ
人の表ハ月ハ
きて松ふれ
うたてつてわすれ秋の表
鄭多人来武蔵白鳥別
雑

狗川のわたりうなゐ旅出哀れ
雪毛り絡ふ菊を手に持て
蓑毛ると言ふ
笑ふ蓑と朝絡菊の笑顔山
なる及ういたて言ふる白とられ
四月ふ七月の表月ふ月を悔て之序
沈みをさそなうと松の力ふ
中之二句
わすれ笑ふ笑ありとの魂もく
霊ふ玉消ぬほけふ秋の表
九月八日江戸ふ立ハ
そのうあるやセもうの秋を
こうれてうう又猛ふ

その秋はおほえハなきえ富士の元
の秋やむらくをかくて富士ひとう
第相山まて高をそ
ふるかたはまねくこの尾花こるよ
江戸より富かうて
秋立や富士をそこるる旅ゆう
鯉水とうの人来在て系許うたるようて説話
の物語なとしるるやて伊豫国より帰なんと
いうほとまて送りる
秋ふもせ系地新や旅ふろ

髭老菜子

ふるまて来て新ようむくを
る集誦
七月の末新藤茶の母の
ようとうを悔て
ふるまてるの上ようて蕎茶
初秋
初秋や耳かけつる新ほう茶
る九月侍重のほうる用先をうをもうる
人来てなく常髪未ようを変てみうし
秋て先此宮ゆつる朝ちかけ
久しぶりきる人の来るの母ようのちの死出る
江戸へうてなんとやしうなるに

行馬の[illegible]なし菊の[illegible]
[illegible]
[illegible]
五十かな
[illegible]
三宅吹東十三回忌
神[illegible]ちのむかし[illegible]待る[illegible]
七夕
七[illegible]
[illegible]

十六夜
一輪[illegible]うけの[illegible]尾の山[illegible]
門[illegible]
[illegible]
[illegible]
佐川氏[illegible]
秋[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
十三夜
[illegible]

[illegible]秋の[illegible]も奥[illegible]月

玉井氏相[illegible]旅[illegible]

のもなむけ[illegible]句を[illegible]

られをつ[illegible]

[illegible]

[illegible]月の白し[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

月影[illegible]

小[illegible]月の[illegible]

[illegible]雨[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]伊勢の俳[illegible]鳥丸光廣[illegible]の[illegible]
小堺の小町の末孫をたゞ大[illegible]光[illegible]大[illegible]光[illegible]の
[illegible]わを求て[illegible]永十一年[illegible]月十[illegible]
[illegible]り

[illegible]かゝ[illegible]て[illegible]る[illegible]を本[illegible]

[illegible]月[illegible]
[illegible]

[illegible]を梅乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

弦泊

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

上月十日新製詠歌の御用新よ仰蒙る我後て
初二字に除やらはれて舟を乗
十二月二日　当歌一つ
春秋の歌の吹分やひろうもき
おなし月十五日夜
月のつもりて叶ふ
伊勢と共に名あるあをたのそしき
年のくれ　以下十三句
紅のそうれ陸くいろめし紅
年毎年の年なるまれを

年をまつふいはやるの花うう
時あうと園をふそんとしめ
うは春もあうもあう須磨ん
年の淀まくひとも伝まて
うは漁や新の世話も角田川
人戸口のもつ年の奥
年の塵新のる業よ代や歌
花まうもう行よもう年車
年末めも奥乃れるよるの新

[illegible]市より[illegible]山[illegible]岸[illegible]河を渡り[illegible]飾[illegible]

元禄十五壬寅年 五十年忌 四文

[illegible]死なて[illegible]八[illegible]

壬白[illegible]湯[illegible]

緩目[illegible]分を入八日用う大事[illegible]

又内[illegible]て[illegible]

九月十三

[illegible]八[illegible]

[illegible]人の口[illegible]

[illegible]と[illegible]

[illegible]坊

[illegible]の湯を[illegible]類[illegible]

[illegible]時[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十九日鬼次よりそれとなく流行の出を
[illegible]時多句して奥より[illegible]

[illegible]

十月十三日伊勢国義[illegible]

夕月のさしそめて[illegible]小六月

[illegible]海の人[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うめつゝ日はの桶先にあるゝみ

江戸にて在りし時あるべきはうしの段にて

雪素に移るうしゆめ　ん　花

旅伯

庭花を旅猫の色あるれ

ゝ

雪ゝゝあるべき　根なきと　堀の花車

仁京和尚の新宅に招ゝて布袋の絵に

ゝゝふきを添て出ゝ作る

春　餘や幸あるべ乃花ふゝゝ

弦宮の庭花を見て

根あるゝや　するの　庭の旅月ゝ

題　大思天

叶ゝて　陽に作る　氣の花

部あるゝ宅にて　サゝ根絵を

ゝもゝ作　ひや色の　ん花

ゝ宅にて　接拶

陽の色ゝて　色乃笑ひ氣

題王襄

[illegible]

[illegible]

年内之事 二句

[illegible]年の内

年を[illegible]む 松も 地の角 泪の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

十月廿日大森[illegible]勇[illegible]廿年を[illegible]て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いつ蒲ていつ降雪のむすはは

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平敷屋

[illegible]

宗角[illegible]

達人[illegible]

月[illegible]て流拾[illegible]一[illegible]れ　民慶

[illegible]

[illegible]

老も[illegible]と[illegible]

[illegible]

[illegible]